



コルネリス・ド・ヘーム [1631-1695]

《果物籠のある静物》

1654年頃

油彩、板

44.5×72.5cm

左下に署名

Cornelis de Heem [1631-1695]

Still Life with a Basket of Fruits

c.1654

Oil on panel

44.5×72.5cm

Signed lower left: C. DHEEM. f.

P.1990-2

Provenance:

Coll. Georg Eberle (?); Xaver Scheidwimmer, München.

Bibliography:

Sam Segal, *Jan Davidsz. de Heem en zijn Kring* (Exh. cat.), Centraal Museum, Utrecht and Herzog Anton Ulrich-Museum, Braunschweig, 1991, pp. 198-199, fig. 35a.

コルネリス・ド・ヘーム(レイデン, 1631—アントウェルペン, 1695)は、17世紀ネーデルラントを代表する高名な静物画家の一人、ヤン・ダフィッツゾーン・ド・ヘーム(ユトレヒト, 1606—アントウェルペン, 1683/84)の息子である。

父ヤン・ダフィッツゾーンは、北ネーデルラントのユトレヒトおよびレイデンで活動した後、1636年にアントウェルペンに移住し、それ以後同市を制作の中心地とした。ヤン・ダフィッツゾーンの画風は、北ネーデルラント派の明暗の色調と南のフランドル派の豊かな色彩というふたつの異なる流れを統合したもので、明澄で透明な色彩、さまざまな固有色を包み込む全体を統一する色調、肉眼ではその跡が容易に見て取れないほど細かな筆遣い、多様で変化に富んだ事物の配置などを特徴とする。アントウェル

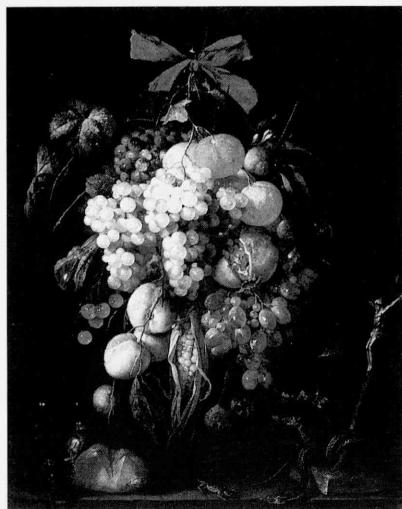
ペン移住後に彼が主として取り上げた主題は、花卉画、花飾り、果物画、食卓画、豪華陳列静物画などであり、描く対象の数を限定した小画面作品から、2メートルを越える大画面作品まで、さまざまな画面サイズの作品が知られている。

息子のコルネリスは、父のもとで静物画家としての修業を積み、また助手として父の制作を手伝うこともあったと推測される。記録から1660年には、アントウェルペンの聖ルカ組合の一員となっていたことが知られる。そして、1676年から1687年頃にかけてハーグに在住した時期を除いて、主として同市で活動した。コルネリスは、父ヤン・ダフィッツゾーンの画風の最も優れた継承者で、その最良の作品においては、父に匹敵する力量を見せている。描いた絵の主題も、ほぼアントウェルペン時代の父の作品と共通するが、一部の大画面作品以外は、主として比較的小さな、単純な構図の作品を描いた。晩年には、父の様式から離れて、硬直したマンネリ化した作品を制作するようになる。

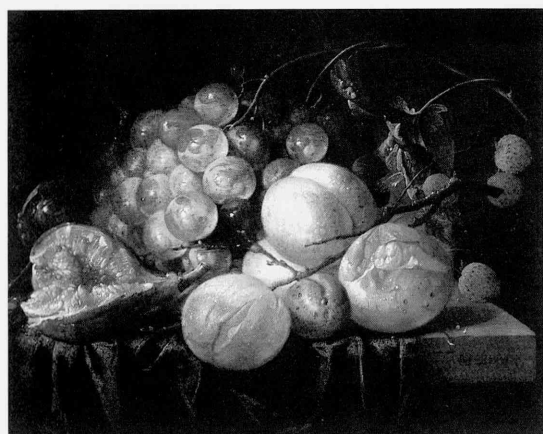
横長の画面をした本作品は、コルネリスの初期の作品であり、暗緑色の壁の前に、緑色の布が掛けられた木製のテーブルが、画面に平行におかれている。木製のテーブルは、コルネリスの初期に頻繁に見られるモチーフである(後年にはそれに代わって、大理石製のテーブルや台座の上に重ねられた数枚の硬質の石のプレートが登場してくる)。画面左には、むき出しになったテーブル板の奥行きを示す左から右へと走る斜めの線が見られる。この斜線が構図の基本となっており、テーブルのやや右寄り中央部では、葡萄、桃、杏、桜桃の入った籠が、左側を上にして、この線に呼応するように斜めに配されている。その左側では、2個の胡桃、レモン、葡萄の房および葉によって斜線が形

成されている。そして、剥かれたレモンの皮が、中央部に向かって下弦の弧を描いている。籠の右側には、籠の底の支えとして、一部が切り取られて果肉を見せるメロンが置かれ、その右側には、二つの無花果(その一つは果肉をのぞかせている)が見える。色彩は、鮮やかではあるが、拡散的には用いられておらず、緑色を基調として、赤、黄、紺色などによって効果的なアクセントを付与されている。

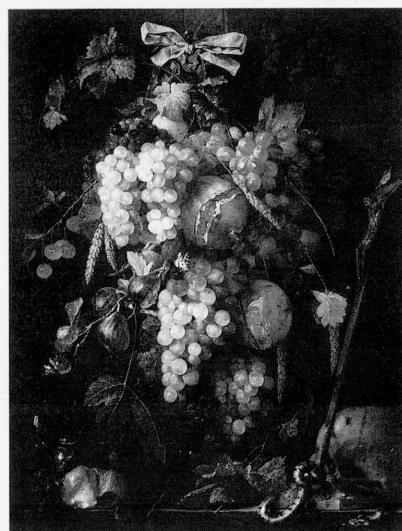
ところで、本作品には、3段に積み重なったテーブル板の中央の板の縁に、C.DHEEM.f.の署名がついており、DとHは結び



参考図 1



参考図 2



参考図 3

合わされている。これはコルネリスの初期に典型的な署名の仕方であり、同様の署名のついた同じく果物を描いた作品が他に2点知られている(《吊るされた果実飾り》と《果物の静物》、参考図1, 2)。¹⁾ これら3点はひとつのグループとして考えることができるだろう。このうち、《吊るされた果実飾り》には、1654年の年記が入っており、本作品も同じ頃の制作と思われる。興味深いことに、《吊るされた果実飾り》は、前年の1653年に父が制作した同主題の作品(参考図3)²⁾を参考にしながら、その空間構成やいくつかのモチーフを若干変更して描かれた作品であり、この時期のコルネリスが父にいかにか依存していたかが知られるとともに、同時に自らの創意も意欲的に打ち出さんとしていたことが明確に窺われる。

(中村俊春)

註

1) 前者は、London, Private Collection, 油彩, カンヴァス, 72.5×56.5 cm; 後者は、London, Rafael Valls Gallery, 1988, 油彩, 板, 19.7×22.8cm, and New York, Newhouse Gallery, 1988. 次の書も参考のこと。Exh. cat., Sam Segal, *Jan Davidsz...*, op. cit., pp.198-199, cat.no.35.

2) National Gallery of Ireland. inv.no.11 油彩, カンヴァス, 85×65cm; Exh.cat., Sam Segal, *Jan Davidsz...*, op.cit., pp.177-180, cat. no.27.

* 本作品の調査研究に際して、ミュンヘンのクラウス・グリム博士およびアムステルダム・セーハル博士からいろいろとご教示いただいた。心より感謝申し上げます。

* * *

Cornelis de Heem (Leiden 1631—Antwerp 1695) was son of Jan Davidsz de Heem (Utrecht 1606—Antwerp 1683/1684), one of the leading still-life painters in the 17th century Netherlands.

Cornelis' father, Jan Davidsz, was active in the Northern Netherlands in Utrecht and Leiden and then moved to Antwerp in 1636. The father's style was a combination of two different schools; one, the chiaroscuro of the Northern Netherlandish school and the other, the rich colouring of the Flemish school. His strong, clear colours were unified in tone. His brushwork was so minute that it could hardly be detected by the naked eye and he produced a variety of compositions. After moving to Antwerp, his main subjects were flowers, floral decoration, fruit, table-scenes, and gorgeously arranged still-lives. They varied in size from small images with a limited number of subjects to large works measuring over two metres.

The son Cornelis is considered to have been apprenticed to his father and also to have served as his assistant. Record shows that he was member of The Guild of Saint Luke in Antwerp in 1660. With the exception of the period from 1676 to 1687, during which he stayed in the Hague, Cornelis was based mainly in Antwerp. Cornelis was the foremost successor of his father's style and his best works exhibit a talent equal to his father's. The subjects more or less overlap with those of his father's Antwerp period, although, with the exception of a few large-scale works, most of Cornelis' works were fairly small and simple compositions. In his late years, Cornelis departed from his father's style and began to produce rigid, stereotyped works.

The horizontal image under discussion, in which a wooden table covered with a green cloth is placed in front of a dark green wall, dates from early in Cornelis' career. The wooden table is a motif frequently found in Cornelis' early works. (In later years, he would paint marble tables or solid stone plates stacked on a pedestal.) To the left of the panel, as if to stress the depth of the image, the table remains uncovered with the wooden edge running diagonally from lower left to upper right. This slant forms the axis of the composition, with a basket of grapes, peaches,